

<実践報告>

2021-2023年群馬大学オンライン英語サマープログラムの 実施結果に関する報告

—短期留学生受入プログラム動向について—

陳 雲 蓮、野 田 岳 人、松 田 デレク

要 旨

本報告は、群馬大学が2021年から2023年まで実施したオンライン英語サマープログラムのアンケート調査結果の分析を中心に、短期留学生受入プログラムの動向について示すものである。主な論点は、英語プログラムの参加者の属性、学習トピックに関する学生の関心度、学生の学びたいトピック、国際共修と異文化間理解に対する学生の認識と主催側の取り組みである。本稿を通して、国際共修と異文化間理解を促進するために、異なる国籍、専門、学年といった多様性のある学生の確保、日本あるいは地域の社会、文化、先進的・科学的、医学に据えたトピックの提供の重要性が浮かび上がった。その一方、日本人学生と外国人留学生の成績評価基準、異文化間の学びなどの面における国際共修の課題も指摘することができた。

【キーワード】 短期留学生受入プログラム、英語プログラム、国際共修、異文化間理解

1. はじめに

2021年から2023年まで、群馬大学は群馬県の伝統文化と科学技術の伝承、自然と人間との関係を中心に、短期留学生受入のサマープログラムをオンライン形式で実施してきた。その中で留学生がショートプログラムを通じ、日本で学びたいトピックやオンライン実施に関する課題を見出すことができた。プログラム担当者らは留学生のニーズに応えるように、プログラムの内容、国際共修の実施形態を模索してきた。現在、本学において、本プログラムは国際共修の教育プログラムとして定着している。

本プログラムでは、本学と国際交流協定を結んでいる大学から学生が参加して、7日間程度、英語による講義とプロジェクトワークが行われた。この講義とプロジェクトワークは「日本事情コース」と呼ばれ、日本や群馬に関するトピックが取り上げられた。また、参加学生と本学の日本人学生や留学生との間で交流するための時間が設けられ、学生たちは、自分の国・地域の文化や社会の紹介、若い世代で共通するサブカルチャーやゲームなどについて意見交換などを行った。こうした国際交流活動

も英語で行われた。

本稿の第2節と第3節では、2021年～2023年の学生アンケート調査結果の分析を中心に、主として参加者の属性、学習トピック、国際共修の観点から、群馬大学のサマープログラムの実施状況について報告する。なお、2021、2022年のサマープログラムの個別報告は陳・野田・田中（2021）と陳・野田（2022）を参照されたい。第4節では、本プログラムにおいて重視してきた「国際共修型の学び」について、2023年の本プログラムの取り組みを報告し、国際共修型の授業が異文化間理解につながっていく点を指摘する。最後に、短期留学生受入プログラムの動向を示し、本プログラムの課題と今後の目標に言及したい。

2. 2021年から2023年のサマープログラムのアンケート調査の内容

本節ではまず2021年～2023年のサマープログラムのアンケート調査の内容について説明する。参加者からサマープログラムの全体構成、講義内容、教育効果に対して客観的な評価と指摘を得られるように、アンケート調査票は（1）「プログラムの内容と期間」、（2）「各講義のトピックに対する評価と理解度」、（3）「プロジェクトワークの形式と課題」、（4）「プログラムの不足点と課題」、（5）「今後の学びたいトピック」という5つの部分で15問より構成されている。各項目の評価段階は1から5と設定している。

このアンケート調査をプログラムの一環と位置づけ、3年連続でプログラム直後に実施した結果、2021年は54名（修了者61名、回収率89%）、2022年は18名（修了者18名、回収率100%）、2023年は29名（修了者28名、回収率103%）¹⁾の回答があった。この回収率から、アンケートに対する回答は参加者のプログラムに対する主流的な意見を反映していると考えられる。

3. 2021-2023年のアンケート調査結果のデータ解析

3-1. サマープログラムの参加者の属性

本節では、参加者²⁾の属性として、所属大学と学年に注目して3年間の人数を比較する。まず、参加者の所属大学の国・地域を見てみよう。表1はそれを示したものである。各年ともアジア地域とヨーロッパ地域からの参加で、全体の7割を超えている。アジア地域では、インドネシアの大学からの参加者が最も多く、台湾と中国の大学からの参加者がそれに続いた。ヨーロッパ地域ではハンガリーからの参加者が多かった。アジアとヨーロッパの多くの国・地域から学生が参加したため、プログラムを通じて、相互に異文化理解を深めることができた。地理的にいってもアジアに偏るのはやむを得ない点もあるが、年ごとに偏りも少なくなってきた。多くの国からの参加者を迎え、地域的なバランスを維持していくことも今後の課題である。

表1 プログラム参加者の国・地域

国・地域	アジア						ヨーロッパ								合計
	中国	インドネシア	台湾	タイ	日本	小計	アゼルバイジャン	ハンガリー	イタリア	リトアニア	スロベニア	ポーランド	イギリス	小計	
2021年	1	36	10	3	0	50	2	7	1	0	0	0	1	11	61
2022年	0	10	4	0	0	14	0	3	0	0	1	1	0	5	18
2023年	9	9	2	0	1	20	0	5	0	1	0	1	0	7	28

(単位：人)

表2 プログラム参加者の学年

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院生	その他	合計
2021年	9	34	3	14	1	0	61
2022年	4	8	1	3	2	0	18
2023年	9	9	3	3	0	4	28

(単位：人)

次に参加者の学年の人数を比較する。表2にそれを示す。3年間の参加状況を見ると、2年生以上が多く、2021年は全体の80%を超え、2022年は80%弱、2023年は70%弱であった。また、年によっては1つの学年に人数が集中することもあったが、徐々にそれぞれの学年に人数が分散した。

本プログラムの企画段階においては、低学年の学生を対象にして、講義やプロジェクトワーク、最終発表、国際交流活動などの内容が作られていた。講義を担当する教員らも来日したことのない外国人留学生が理解できるように講義の水準や内容について配慮した。表2に見られるように、参加者が高学年を含め、各学年に分散したことで、プロジェクトワークの実施によい影響が見られた。それは、講義内での議論やオンライン調査研究の結果をまとめるにあたり、高学年の学生にファシリテーターを指名することができ、グループでの作業を円滑に進めることが可能となったからである。

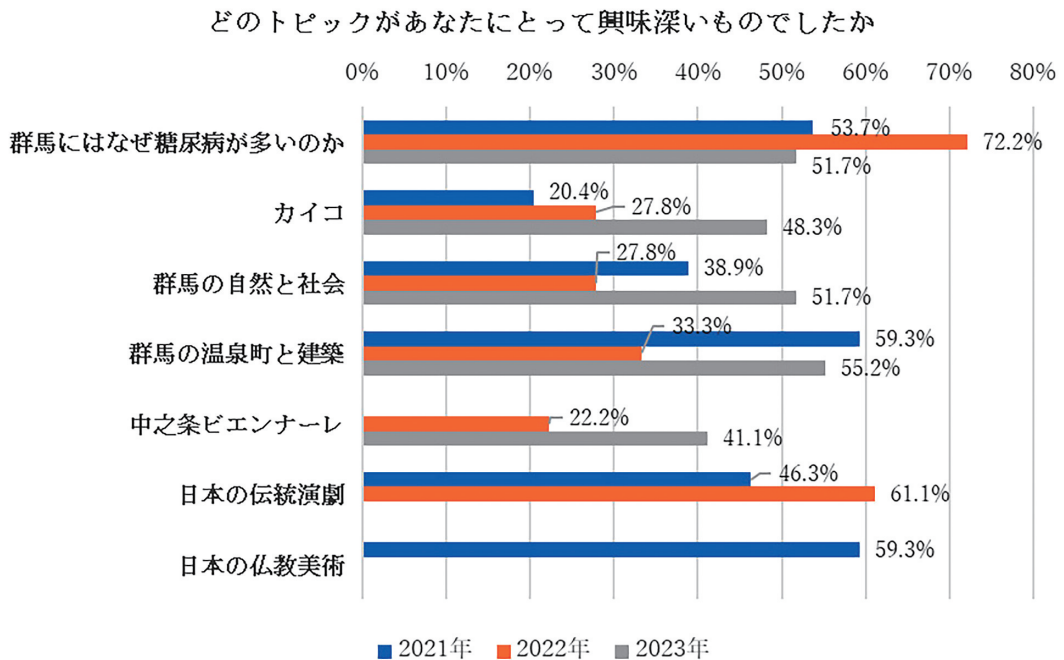
3-2. 講義のトピックに対する関心度

本プログラムのプロジェクトワークの実施とは、まず、参加者でいくつかのグループを作り、特別講義を聴講して、その後、その内容についてグループで内容を検討する。論点などを出し合い、報告するというものである。3年間のプログラムから振り返ると、群馬に関係するトピックは、「群馬県にはなぜ糖尿病が多いか」、「カイコ：日本と群馬におけるこれまでの歴史と将来の可能性」、「群馬の温泉町と建築」、「群馬の自然と社会—赤城山を中心に—」、「中之条ビエンナーレ³⁾」の5つであった。最初の4つは、2021年から続いている講義で、「中之条ビエンナーレ」は2022年から2年連続の講義である。日本に関係するトピックは、「日本の伝統演劇」と「日本の仏教美術」であり、前者は

2021年から2年連続、後者は2021年のみの講義であった。

図1は3年間の講義のトピックと参加者の関心度を示したものである。アンケートは複数回答可で、回答者数は2021年54人、2022年は18人、2023年は29人である。各年によりばらつきがあり、3年間すべてにおいて50%を超えたトピックは、「糖尿病」に関するものであった。年度別に見ると、50%を超えたトピックは、2021年は「糖尿病」、「温泉町と建築」、「仏教美術」に関するもの、2022年は「糖尿病」、「伝統演劇」に関するもの、2023年は「糖尿病」、「自然と社会」、「温泉町と建築」に関するものであり、各年において参加者の多くが関心を寄せたトピックは複数存在していた。

図1 各トピックに対する関心度



本プログラムでは、参加学生の属性（学部・大学院、学年、専門分野など）について限定をせず、広く学生を公募している。その結果、学生の学問的関心にばらつきが現れるのも当然のことだが、その中でも、各年複数のトピックに多くの関心が持たれていた。本プログラムのような参加者の属性を限定しない短期留学生受入プログラムでは、専門性を保持しつつ、参加者の学問的関心を満足させるための工夫が必要となる。

3-3 留学生が日本で学びたいトピックの傾向

アンケートでは、「参考までに将来どんなテーマについて（“For the future reference, what kinds of topics do you want to learn more about?”）」という質問項目を設定し、参加者の学生たちに記述式で個別に回答してもらった。例えば、テクノロジーを学びたい学生は、「テクノロジーとイノベー

ション：日本は先端テクノロジーとロボット工学を有することで知られている（“Technology and Innovation: Japan is known for its advancements in technology and robotics, and learning about their latest innovations is intriguing for each enthusiast.”）、「日本の最新のイノベーションはテクノロジー愛好家にとって非常に興味深いものである」と回答している。このような個別の回答（回答数29）を簡略に日本語に翻訳し、分野を5つのカテゴリーに整理した。その結果が表3である。

表3 2023年における参加者の学びたいトピック一覧

分野	トピック	回答数
日本社会	日本人の日常生活、伝統的習慣と社会規範、日本人の日常生活、社交、日本社会、日本人の心理、日本人のいきがい、生活の楽しみ、日本社会と芸術	7
言語・文化	日本語、日本文化、アニメ、食文化とカートン、自然と動物、折り紙音楽	7
医学、看護学	看護の研究と看護師の仕事、日本の医学と看護、日本の医学、病気 日本の医学、伝統的薬、医学、生物学	7
歴史	例えば明治維新、都市、芸者、侍、群馬の歴史と有名な場所	5
テクノロジー	テクノロジーとイノベーション、テクノロジー	3

第一に、日本社会（7回答）には、日本人の日常生活、伝統的習慣と社会規範、日本人の心理、日本人の生きがいなどが含まれる。外国人留学生の日本社会あるいは日本社会の変容に対する見方と好奇心の示すところを反映している。

第二に、医学と看護学（7回答）には、専門的な医学と看護学のトピックが示されている。この点に関しては、医学、看護学の学生が多く参加されることに原因があると考えられる。日本社会は高度な医療と看護の技術を有すると見られるため、今後のサマープログラムにおいて、医学や看護学に関する専門的テーマを続けて提供していきたいと考える。

第三に、言語と文化（7回答）には、日本語、日本文化、アニメ、食文化、自然、折り紙といった多岐にわたるものが多かった。

第四に、歴史に関しては5回答が得られた。具体的に明治維新、都市の歴史、芸者、侍、群馬の歴史について学びたいと回答している。上記3つのカテゴリーに比べると2回答が少ない。プログラム企画者にとって、医学や科学技術が特に重視されている現代社会において留学生が「日本や群馬の歴史に興味がある」というのはやや予想外ではあるが、歴史は留学生にとって現代日本社会を理解する上で重要な学問であると改めて認識した。

最後に、テクノロジーに関して3回答が見られ、具体的にテクノロジーとイノベーション、テクノロジーであった。

以上、2023年度の「学びたいトピック」のアンケート調査の結果を分析した結果、参加者は日本が持つ新しさと古さへの興味を持っていることが分かった。前者は、高度な技術や先進性に見られ、後

者は、歴史や伝統、慣習などに見られる。これは、短期留学生受入プログラムを企画する上で重要な示唆を与えよう。

3-4. 日本人学生との国際共修に対する関心度

2021年の本プログラムでは、講義やプロジェクトワークとは別に学生の国際交流活動を促進するため、本学の日本人学生と本プログラムへの参加する学生との間で各国の概要や文化・社会などを紹介し合う時間を設けた。本学の日本人学生は6名、プログラム生も6名が参加し、1人につき15分で発表を行った。全体の国際交流の時間は2時間半以上にも及んだ。2022年には内容をより学術的にし、アカデミックプレゼンテーションという形式で双方の学生がテーマを決めて発表した。双方の学生の日程や時間の調整をしつつ、「ともに学ぶ」という国際共修の理念に沿った内容に変えていった。本学の日本人学生は8名、プログラム生は5名が参加し、アカデミックディスカッションを行った。そして、2023年のプロジェクトワークには本学の日本人学生も参加した。詳細については次節に譲るが、国際共修という点からも本プログラムが少しずつ発展していることが分かる。

各年のアンケートでは、本学の日本人学生との共修を求めている学生は90%前後に及んでいた。今後は本学の学生がさらに参加できる学内の環境を整え、国際共修を進めていきたい。

以上のアンケート調査結果を踏まえ、次節では国際共修に対する取り組みおよびその結果である「異文化間理解」を中心に検討していきたい。

4. 国際共修に対する取り組みと結果

4-1. 取り組み

国際共修とは、多様な言語・文化背景の学生が意味ある交流を通して学び合う授業・活動形態である(末松、2019a: 2)。このような形態の授業を通して学生は多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新たな価値観を見出し、より寛容で多角的な視点で身の回りの社会や国際社会を捉えることにつながると考えられる(末松、2019b)。このような目的で、2023年度のサマープログラムでは、より体系化した国際共修型の学びを実現し、群馬大学生が参加しやすいようにサマープログラムの授業化を図った。

新規開講授業は群馬大学生向けとし、全学部履修可能な教養教育総合科目として開講した。本授業では、サマープログラムが始まる前に異文化間コミュニケーションに関わる知識を身につけ、群馬大学生が効果的なコミュニケーションが取れるように予備知識を身につけるような授業を実施した。ここでは、授業担当講師はグローバルな人材育成や組織開発で使用される国民文化に基づいたホフステードの6次元モデル(Hofstede, 2011: 8)を説明し、また履修者に多様な考え方を持ってもらうためにスチュアートホールの文化的アイデンティティの理論(Hall, 1990)に関する学習も求めた。このように履修者は、文化やコミュニケーションについて主観的な捉え方でなく、客観的な物事の捉え方について学ぶことができた。授業名を「異文化間教育実践」とし、実践を通して異文化間教育の実

態を客観的に捉えることを試みた。その目的とは、本授業の履修者は、サマープログラムの目的と別に、サマープログラムでの活動を客観的に捉え、異文化環境の中で如何に自分の意見を述べ、グループワークを通して異文化間理解を涵養することである。2023年度は、初めての試みだったため、本授業の意図の伝え方や実施期間等から多くの履修者を募ることはできず、結果的に1名の学生が履修した。

サマープログラム期間中、授業担当講師は、履修者のディスカッションの様子やグループワーク後のプレゼンテーションを見て、事前授業での学びを活用しようとする履修者の姿を確認できた。多様な国の学生とともに学び、ディスカッションを通じて自分自身の意見を述べる難しさや、多様な背景を持つ学生を理解した上で効果的なフィードバックをすることにも苦戦しているところが見られた。サマープログラム中は履修者への個別の指導はせず、本人がどのように対応し、解決しようとするのかを記録するようにアドバイスをした。サマープログラム後、プログラムでの異文化間教育に関わる実践的な学びと事前授業で学んだ理論的な内容を組み合わせ、実践を通して理論的な内容の理解を深める授業を行なった。履修者は、自身が体験した困難な状況やミスコミュニケーションについて振り返り、その要因は何だったのかを分析した。異文化によるものか、その他の要因があるのかを一つ一つの経験を分析した。履修者による分析を発表してもらった後に、講師はフィードバックを行なった。その結果、履修者は自身の客観的な視点をより養う必要があるということ、そしてより多くの経験をを通して学びを深めたいという気持ちが強まったという感想を共有した。

「異文化間教育実践」では、履修者が少なかったものの、学びを深め、異文化間教育での実践を通して、履修者は自らのものの見方や実践と座学を組み合わせ、学びを深めることができる可能性を感じ、さらなる学びへとつなげられると考えている。今後は、本授業における学びを見える化し、より多くの学生に興味持ってもらえるようなシラバスの書き方などを工夫したいと考えている。

4-2. 国際共修から見る異文化間理解

前節でも述べている通り、国際共修とは多様な言語・文化背景を持つ学生が共に学び、協働学習を通して学びを深化する授業・学びの形態である。新型コロナウイルス以前には、実際に海外の大学に留学し、日本に留学生を呼び込み日本の大学内で日本語を学ぶことで国際共修型の授業を展開していた。しかし、コロナ禍で急速にオンライン授業の普及が進み、日本の大学におけるオンライン授業が一般化した。文科省（2020）の調査では、コロナ禍で遠隔授業を展開した大学・短大・高等専門学校896校（全体の8割強）に上った。国内の授業だけでなく、コロナ禍で渡航を伴う留学ができなくなり、国際教育が促進できない中、多くの大学はオンライン留学という形で海外大学とのオンライン授業を展開し始めた（渡部ら、2022）。群馬大学でも学生が海外の大学が提供するオンラインプログラムに参加することが留学の代替措置として取られ、国際教育を推進するよう取り組んできた。オンライン留学プログラムの多くは、語学学習に留まるものも多く、時差などの影響で参加が難しいプログラムも散見された。学生が持つ英語能力を用いて海外学生と同じ立場で議論し、日本について学

びながら英語で議論をした内容を発表する機会がほとんどなかった。群馬大学が展開するサマープログラムでは、群馬の実情から日本社会を知ることが目的として定めており、群馬大学生にとっては馴染みのある内容を英語で学び、議論し、発表することで本学の学生でも参加しやすいオンラインプログラムとなっている。それにより学生はディスカッションや発表に対して積極的になり、海外学生から質問される立場となり、自ずと英語を使う機会が増える。このようなメリットが日本におけるオンライン共同授業にあると考えている。そのような特徴を鑑み、本学で実施するサマープログラムにおける国際共修型プログラムから見る異文化間理解教育について考察をしていく。

異文化間理解について考える際、「異文化間」について読み解く前に、どのような「理解」が求められ、私たちは何を、どのように「理解」するのかを考慮する必要がある。麻生（1995）曰く、「〈理解〉とは他者や他者の発言を自分の枠の中に引き込むこと、その意味での自分への〈同一化〉」である（麻生健、1995）。それは、自分自身を他者に近づけるのではなく、他者を自分の理解のできる枠に近づけていることとなる。しかし、自分自身の捉えるその「枠」とは動かないものではなく、それは絶えず変化する（麻生健、1995：77）。しかし、他者を「他者」として認識せず、互いの間にある「差異」を無視し、相手の発言に疑問を持たず、鵜呑みにすることで微妙な誤解や思い込みを解くことにはつながらず、硬直化することにつながり、他者への理解が進まなくなる。よって、他者を「理解」するためには、自己認識を明確化し、自覚する必要がある。他者と接触し、自分自身の考え方を相対化させ、自己認識を自覚していく経験こそが自己認識の枠組みを形成していくことに必要なのである。一度形成した自己認識の枠組みを固定化するのではなく、他者の認識枠組みに対する想像と検討を行い、自己認識枠組みと突き合わせ、分析的・吟味的な解釈を加えながら創造的な修正をしていくことが重要である（山本玲、2005：122）。このような作業を経て、理解が深まり、自己認識枠組みが変容、進展していくと考えられる。

さて、本稿で扱う日本人学生にとっての「他者」とは、言語・文化的な背景が異なり、生活様式も異なる可能性が大いにある他者である。日本人学生の異文化間理解を深めるためには、まずは自己認識を如何に見える化し、それを海外学生の認識と突き合わせ、自己認識の再形成へとつなげるかがポイントとなる。国際共修の前に行った授業において、日本側の履修者の自己認識について、異文化間コミュニケーションにおいて学ぶ「バイアス」について考える際に内省する作業を行なった。海外学生でなくても、日頃の生活の中に存在する様々なバイアスに基づいた自分の自信の考え方について思い出しながら、自己認識の所在について捉える作業の道筋を共有した。それは、海外学生とだけでなく、自分とは異なる他者との接触の際にも役に立つ作業であり、日常生活の中でも取り入れられる実践であると考えている。このように他者を理解しようとすることで、自己認識に見える化し、それを如何に調整していくかで、自分の理解の範疇に収めることができるかにつながっていく。

国際共修型の授業において、その「他者」は言語・文化的背景の異なる人びとが対象となる。同じ文化圏や日頃から接している他者であれば、自分自身の予測でき得る「差異」について調整し、コミュニケーションをとることができるが、自分とは全く異なると認識している人びととの接触の際に

は、どのようなことを意識する必要があるのかを問う必要がある。事前授業では、既述の通りバイアスの気づきに着目し、履修者に自分自身が持ち得るバイアスについて内省をする作業を行なった。次に、エポケー実習について学んだ。エポケー実習とは、異なる意見や態度についてすぐに自己認識の中で処理をするのではなく、一度その判断を保留にし、文化的・コミュニケーション方法の差異によるものであるのかについて考え、必要に応じて相手に尋ねることも考慮することである。このような作業を行いながら、履修者は国際共修型の授業に挑んだ。

事後授業では、履修者はやはり様々な困難に直面し、グループ内でのコミュニケーションが上手くいかなかったことがあったと報告した。その中で、履修者は文化的な違い、コミュニケーション方法の違い、そして特定の人物が持つ独特な背景からくる違いというように直面したミスコミュニケーションの要因について分析し、それぞれに対応しようと試みたことが共有された。全ての課題を乗り越えることはできなかったそうだが、少なくとも自己認識を変容し、進展させることにつながったという報告があった。また、サマープログラムで得られたこの体験では、自分自身が日本のことを海外学生より知っており、情報を持っていることから、いわゆるマジョリティ的な存在だったと認識している。そのことから、自分自身をマイノリティ的な立場に置いた際に、他者の認識と自己認識がどのように衝突し、どのように自分自身が擦り合わせていくのかに関心を持ったことから、海外へ渡航し、多様な人びととディスカッションをしながら、自己の異文化間理解能力を高めたいという気持ちにつながったという発言もあった。

今回のサマープログラムにおいて、日本側の履修者は自己認識が見える化し、他者との差異を図りながら、自分なりのコミュニケーション方法を見出し、かつ海外の人びととの異文化間コミュニケーションを通じた自己認識の変容、そして進展したいという意志を育むことにつながったと考えている。異文化間理解における学習者の基礎的な心構えが培われたと考えられる。今回の分析は日本側の履修者のみであり、海外からオンラインで参加した学生の意識の変化や自己認識の変容について見ることはできなかった。

今後は、国際共修型授業後の双方の認識の変化について分析し、双方に与え得る効果について検討したいと考えている。

5. おわりに：短期留学生受入プログラムの動向について

本報告は、主に参加者の学年、所属大学、国あるいは地域、トピック、国際共修といった点から2021年から2023年までの群馬大学サマープログラムの実施状況について報告し、考察を行った。本稿により得られた知見に基づき、今後の短期留学生プログラムの動向についてまとめたい。

まず、国際的視点から日本と地方都市の課題や地域文化を中心に、人文科学、医学、理学、工学分野に跨る講義内容でプログラムを構築することが求められる。さらに、参加者の専門分野、学年、来日経験を考慮し、講義の平均的難易度はリベラルアーツ科目の水準に相当するものがプログラム運営

上に有利であると考ええる。

次に、国際共修ならびに異文化間理解を確立させるための参加者の多国籍化を図る。過去三年のデータから見ると、特定の国または地域からの参加者が多いが、各国の文化を理解するために、多国籍からくる参加者の確保が今後の課題である。それは異なる国の参加者が興味を示すプログラム内容のみならず、広報にも力をいれないといけないと考える。

最後に、2023年度において、本プログラムは群馬大学生への授業化をしたが、学生の評価や授業を通じての学びは、異文化間における学びに限定され、サマープログラムの授業内容そのものへの評価ではなかった。また、海外から参加した協定校等の学生は修了書の付与に留まっており、アウトプットの評価においては国際共修型のプログラムとして課題を残している。

今後は、群馬大学生および留学生が同じような評価基準に則って、プログラムそのものでの学びや気づきを共有し、アウトプットにおいても国際共修型プログラムとしての確立ができるように取り組んでいく。

注

- 1) アンケートの回収率は修了者から回答を得ることができた割合を示す。2023年は未修了者1名が含まれている。
- 2) 本項(3.1)では、人数を正確に示すため、プログラムの修了者を参加者とする。なお、修了には出席、発表などの基準を満たした学生に与えられる。本項(3.1)以外のところでは、未修了者も含め、参加者全般を対象に記述している。
- 3) 「中之条ピエンナーレ」は群馬県中之条町で2年ごとに開催される国際芸術祭。講義では、前半、展覧会に出展したアーティストによる出展作品等の解説がなされ、後半、学生との意見交換・交流活動を行った。陳・野田(2022)を参照。

参考文献

- 麻生健(1995)「〈差異〉と〈共存〉」蓮見重彦・山内昌之『文明の衝突か、共存か』東大出版会。
- 末松和子(2019a)「国際共修の検証：文献リサーチを通して見えてくるもの」『留学交流』Vol.95, pp.1-12. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/_icsFiles/afiedfile/2021/02/19/201902suematsukazuko_1.pdf (2023年12月1日アクセス)
- 末松和子(2019b)「学生を主体とした授業づくりと教員の役割」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子 編著『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』、東信堂, pp.254-278。
- 陳雲蓮・野田岳人・田中麻里(2021)「2021年群馬大学オンライン英語サマープログラム『群馬のグローバルチャレンジ：自然、伝統と現代社会』の実施報告と調査データ分析」、『群馬大学国際センター論集』第3号, pp.1-8。
- 陳雲蓮・野田岳人(2022)「2022年群馬大学オンラインサマープログラム『群馬のグローバルチャレンジ：自然、伝統と現代社会』の実施報告と調査データ分析—英語による講義の定着と国際共修の可能性の拡大—」『群馬大学国際センター論集』第4号, pp.33-47。
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況(令和2年7月1日時点)」, https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2023年12月1日アクセス)
- 山本玲(2005)「言語教育における異文化間理解能力の育成」『言語文化教育研究』3号, pp.112-126。
- 渡部由紀、新見有紀子(2022)「ポストコロナ期におけるオンライン留学の役割と可能性 —オンライン型短期留学ブ

プログラムの学習成果を踏まえた一考察—」東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要、8巻、pp.23-36。

Hall, Stuart (1990) Cultural Identity and Diaspora. In J. Rutherford (Ed.), *Identity: Community, Culture, Difference*, pp. 222-237. London: Lawrence & Wishart.

Hofstede, Geert (2011) Dimensionalizing Cultures: The Hofstede Model in Context. In *International Association for Cross-Cultural Psychology "Online Readings in Psychology and Culture"* Vol.2, No.1, pp.3-26.

A report on implementation results of Gunma University online
English summer programme in 2021-2023
—New trends on short international exchange programme—

CHEN Yunlian, NODA Takehito, MATSUDA Derek

Summary

This paper aims to analyze the characteristics and trends of short international exchange programme according to the review surveys of Gunma University online English summer programme from 2021 to 2023. The main points are participant's characteristics, intellectual interests on academic topics, interest level of Intercultural Collaborative Learning (ICL) and cross-culture understanding, and the effort on ICL made by teaching staffs. It is found that in order to encourage ICL and cross-culture understanding, it is important to maintain diversity of participants, such as different nationality, major, school year and providing academic topics from different areas, such as history, sociology, technology and medical science. However, how to create a standard of academic assessment for both Japanese and international students, how to value and visualize cross-cultural learning are remained as issues on ICL.